



| | |
|--------------|---|
| Title | 大衆文化の中の楽観主義 : ポリアンナイズムをめぐって |
| Author(s) | 有田, 亘 |
| Citation | 年報人間科学. 1996, 17, p. 101-113 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/11917 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大衆文化の中の楽観主義

——ポリアンナイズムをめぐって——

〈要旨〉

楽観主義という肯定的であるはずの価値観には、常に現実離れた虚く
さがつきまといっている。しかしその一方で、分別をわきまえた現実主義
の評判がよいわけでもけっしてない。本稿では大衆文化の中での楽観主義
／現実主義の問題を、現実／フィクションの社会的構築の問題として考察
する。その作業を行う際、具体的素材として、エレナ・ポーターの小説『ポ
リアンナ』——日本では一九八六年にテレビアニメ化された——の主人公
ポリアンナの、「よかった探し」と呼ばれる非常に極端な楽観主義を取り上
げる。「ポリアンナ・フィーバー」と呼ばれる社会現象を起こすほど極端な
人気を獲得したその作品を通じて、楽観主義を好む人々と嫌う人々それぞ
れの現実／フィクション構築の仕方と、その相補的關係について論じる。

キーワード

楽観主義・現実主義・社会的構築・フィクション・ポリアンナ

有田 亘

1. 楽観主義／現実主義

楽観主義に対するわれわれの感情はおそらく、相当屈折している。

字義通りにとらえるならきわめて肯定的なはずのその思考法は、
悲観主義——虚無主義・厭世思想を含めて——の対立項として扱われることはあつても、それ自体に思想的意義があるとは通常見なされてはいない。何も考えていない気楽さ、ある種の批判意識の欠如。これらは楽観主義につきまとう否定的ニュアンスであろう。

ただし「物事には善悪両面ある」ことをわれわれは知っている。楽観主義も悲観主義も同様に、一面的な物の見方であることは言うまでもない。実際、われわれは両者を折衷して日常生活を現実的に送っているのが普通である。だがここで、楽観主義のせめて悲観主義と同程度の名譽回復を図りたいとか、楽観主義／悲観主義図式の精密化を行おうといった意欲があるわけではない。（おそらくはそうした二元論自体、悲観主義的な議論の枠組みから導かれていることだろう。）

むしろ注目したいのは、「分別ある現実主義」も楽観主義（悲観主義）同様に評判が悪い、という点である。楽観主義／悲観主義のどちらか一方を選択することをためらうわれわれのアンビヴァレントな感情は、そうした躊躇自体にも向けられている。現実の二面性（という真実）をわれわれが知ってしまったこと、分別をわきまえることへの不快感。だとすれば、一般に楽観主義につきまとう

「嘘くさい」雰囲気、悲観主義との対比で、批判意識や問題意識の欠如」ととらえるのではなく、むしろ「分別くさい」雰囲気を撒き散らす現実主義との対比で、「現実と虚構の分別の仕方」の問題ととらえるべきだということになるだろう。

「社会的構築主義」と呼ばれる流派の社会学はこの問題の考察に役立つと考えられる。

2. ポピュラー・フィクションの社会的構築

社会的構築主義は今日、社会的現実の一つのフィクションとして存在する“というその主張を拡張し、それと同時に、フィクションは一つの社会的現実として存在する。側面をも強調するようになってきている。

A・シュッツやP・L・バーガー、T・ルックマンといった、比較的初期のころの社会的構築主義の含意は次のような主張に整理できる。——社会的現実はいくつもの形で作り出すことができるし、現にさまざまな現実が存在する（いわゆる「多元的現実」の強調）がゆえに、社会的現実を構築するには、その現実に対する疑念を自発的に脇に置く必要がある。（いわば「虚構への没入」によって現実が成立するという観点。）

それに対し、たとえばエスノメソドロジーやそれ以後の研究に見られるような、比較的新しい社会的構築主義は次のような批判的含意を持つものとして整理できるだろう。——人々は「虚構への没入」

によって社会的現実を構築しているが、自らの没入しているものがフィクションであることに自覚的である。(「フィクションと知りつつそれを楽しむ」ような、一定の批判的距離ないしはある種の「共犯関係」の指摘)

これはテキスト理論の分野での近年の成果——「社会はテキストである」と同時に、「そのテキストは社会の中に織り込まれている」と軌を一にする動向と言えるが、ここから文学作品のようなフィクションに対して、社会的現実への一定の批判力を認める立場が生じてくる。

R・スコルズ、L・マキャフリー、P・ウォーなどが提唱した「メタフィクション論」は、文学的自己言及装置を備えた「自意識的」なフィクションに焦点を当てる。たとえば、一つの小説内部にもう一つの小説を物語るもう一人の小説家が登場すること。たとえば、小説内の人物が時空を越えて実在の人物と対話したり、作者や読者と対決すること。たとえば、現実の歴史が小説の架空世界の中で、ありえたかもしれないだけの架空の物語として語られること。

——一見SF的、しかし実際にはほとんどの小説が内在させているであろうそうした形態は、自己反省的なフィクション、自らがフィクションであることに自覚的なフィクションであるというだけのこととで、特に「メタ」フィクションと呼ばれるわけではない。スコルズは、現実の本質を問い直す文学形式を寓意的物語と呼び、その上でメタフィクションを「フィクション自体の本質を問い直すファビュレーション」と定義している。すなわち、メタフィクションが

自らのフィクション性への自覚を通じて、実際の社会的現実のフィクション性をも露呈させる点がここで強調されているのである。^①

こうした議論は必然的に、「文学作品」そのものよりもむしろ、その作品を「読む」または「書く」といった「関与(行為の関係性)」こそが、社会的現実に対して一定の批判力を發揮している当のフィクションである、という主張を含蓄しているよう。近年のいわゆる「ポピュラー・フィクション論」の動向も、こうした流れに沿ったものと言える。大衆小説、映画、テレビ番組など、「人気のある」フィクションが広範な人々の性向、能力、主観性を編成・調整する機能の分析を通じて浮かび上がってくるのは、それがまさしく「人々の構築しているフィクションである、という事実である。この点において現実IIフィクションの社会的構築に対して、「共犯関係」という比喩は一定の妥当性を獲得している。^②

ただし人々は単に、共通の利害関心である同一の現実IIフィクションを仮構している(つまり「共同幻想の維持」という意味において、「共犯関係」にあるのではおそらくない。社会的現実本来多元的であって、同一・共通である保証はないからである。むしろ、現実とフィクションをめぐる複雑な社会的状況の中で思い浮かぶのは、共犯関係には様々な裏切り、錯誤、行き違いがつきものだということである。言い換えれば、「フィクションをそれと知りながら楽しんで」人間であっても、そのフィクションについて「すべてを」承知しているわけでは必ずしもない、ということになる。その意味では、「共犯関係」はある種の「意図せざる結果」として

生じてきたにちがいない。現実IIフィクションを前にしたときの人々の苛立ち、にもかかわらずそれを受け入れることの快楽や後ろめたさは、このことを物語っているように思われる。

多くの人々が胡散臭さをかきつけ、また愛着を感じてもいる楽観主義は、こうしたポピュラー・フィクションの典型例と言えるだろう。——本稿ではこの観点から議論を進める。

3. ポリアンナ

大衆文化の中の楽観主義を考える上で格好の素材を提供してきていると思われる、非常に極端な事例が存在する。エレナ・H・ポーターの『ポリアンナ』(一九一三年)。少女向け児童文学の古典として知られるこの小説は、日本ではフジテレビが一九八六年にアニメ化し、日曜夜七時半からの「世界名作劇場」の枠で放映された。^③

主人公ポリアンナ・フィテアは両親を亡くし、裕福だが頑固で陰鬱な性格の叔母パレーのもとに「義務感から」引き取られることになる。だが天性の素直で明るい性格の持ち主であるポリアンナは、パレーや人々の閉ざされた心を開き、やがて町中すべてが明るく幸せで親切な人々になる…。

『愛少女ポリアンナ物語』というフルタイトルからしてすでに予測されるこのメロドラマティックなアニメのシナリオは、『アルプスの少女ハイジ』や『赤毛のアン』などで「世界名作劇場」が培ってきたお家芸のパターンをそのまま踏襲している。だが重要なのは

その(たしかに楽観主義的な)パターンではむしろなく、結果的にそれを達成することになるポリアンナのやり方である。

第一話の冒頭でポリアンナが父親に、大好きなハムエッグが貧乏ゆえに今日は食べられなくても「今度食べるときは今日の何倍もうれしいわ、よかった!」と言う場面は、第二話以降を見るかどうか、視聴者の判断を左右したと言ってよい。物語の要点は、ポリアンナという徹底的に善意と明るさに満ちた女の子が行う「よかった探し(glad game)」という遊び(というよりも生き方)にある。

それは登場人物の一人、チルトン医師の言葉を借りて言えば、「何が起こっても、また起ころうとしても、その中からよかったと思えることを探し出して喜ぶ」ことであり、つまりはどんなことでも「ただとにかくよかったと思う(“just being glad”）」ことにはかならない。

ポリアンナは他の人々すべてを愛し、また自分も愛されていることに何の疑いも差し挟まない。たとえば、パレーは姉(ポリアンナの母)と駆け落ちしたジョンを快く思ってはおらず、それゆえポリアンナに父親の悪い出話を禁じる。この仕打ちにポリアンナはショックを受けはするものの、叔母を恨むことはけっしてない。逆に「お父さんのことは聞きたくないと言ってくださる方が、あたしには楽なんだわ。話さない方が「父の死の悲しみを」我慢しやすくなるかもしれない」とその親切を「感謝」する。また、夕食に遅れた罰(というよりは明らかにパレーの嫌がらせ)に台所で牛乳とパンだけですませるように言い渡されたときも、自分の好きなパンと牛乳

を、仲良しのメイドのナンシーといっしょに食べられるようになって「うれしい」と喜ぶ。

要するに、ポリアンナは物事を必ず善意に受け取ることのできる才能の持ち主として描かれているのである。彼女の前に暗さや悪はけっして存在しえない。——このきわめて樂觀主義的な（だけと言ってもよい）物語は、その何かが人々の社会的想像力を刺激した。

「世界名作劇場」は地道に続いている長寿番組という印象があったが、『ポリアンナ』は平均約二〇%の高視聴率を獲得し、普段はその番組枠を大きく取り上げることのないアニメ雑誌の表紙をポリアンナが飾ったり、人気投票で彼女の名前が上位にランクされたりもした。だが人気の大きさ自体よりもここではその性質、人々の関心とその物語の現実表象の仕方に向けられていたことに注目したい。人々はよかった探しの実現可能性に「想像力」をめぐらしていたのである。

『ポリアンナ』をいわゆる「ポジティブ・シンキングのすすめ」として受け取った人々が多い。彼女を見習って一日一回よかったを探す決心を表明する手紙の数々が、アニメ雑誌の読者欄に紹介されている。それらの人々にとって、よかった探しは単なる「処世術」の枠を踏み越える「現実感」のごとき何かを帯びていたように思われる。たとえば『アニメック』誌に寄せられたある男性読者の感想は、その典型的なものだろう。「ポリアンナと「赤毛の」アンは嫌なことがあってもすぐに立ち直れるところが似ている。しかし、アンが想像によって、悪く言えば現実から逃避気味であるのに、ポリアンナの『よかった探し』では現実から逃げ出さない。」

しかし第二話以降を見ようとしなかった人々の大多数の「現実感」はそれとは正反対であろう。というのも、ポリアンナが「逃げ出さない」で立ち向かう「現実」はどう見ても非現実的だからである。ポリアンナが魅力的で愛すべき個性を持った快活な子供だと、作品内では繰り返し語られるものの、彼女の魅力を信じるには相当の努力を要する、とはアニメはもちろん、原作の小説からしてよく指摘されることである。『ポリアンナ』の文学作品としての（特に批評家たちの間の）評判は、古典であるにもかかわらずかなり悪いが、その理由はポリアンナの魅力が同時代の似たような小説——L・モングメリ『赤毛のアン』、K・ウィギン『少女レベッカ』など——に比べて明らかに説得力を欠いているからだとされている。つまり、アンやレベッカは、この世が善と悪からできていること、すべての人々が親切なわけではないことに自覚的である。彼女らはともに自分たちが望まれた者ではないことを知っている。だがポリアンナの純真無垢さ、誰もが善を望んでいるという彼女の信念は行き過ぎであり、不自然である、というわけである。^①

「ポリアンナが実際にいたら困る」とはよく言われることである。たしかに、よかった探しをされて本当に「よかった」というようなことには実際ほとんどならない。フィクションの中なら実害はないが、現実にはかなりの無理と迷惑をとまなうのは間違いないだろう。とはいえ、彼女が現実とフィクションの見分けがついていないとか、あるいは端的に現実を見落としているといった、ただそれがデタラ

メな話である点からのみその作品を断罪することもむずかしい。

現に、興味深いことに「ポリアンナが実際にいたら困る」というすぐれた探しが非現実的なのは折り返みずみであり、自分たちは純粹にフィクションとしてそれを楽しんでいる、というわけである。

当然ポリアンナ嫌いの人々にはそれは矛盾した言い訳めいてしか聞こえないだろう。だがここで絶望的なほど正反対の「現実感」は皮肉な一致をみせてもいるのである。『ポリアンナ』を観て、あるいは読んで「よかった」という気持ちを、一方は少しでも信用の置きぬめものとするために、他方は少しでも疑問の余地なきものとするために、同じ言葉を用いる。どうやら、現実主義的な思考——現実とフィクションの明確な実体をともなった差異——を、人々はいずれにせよ支持しているらしいことがわかる。

そのような差異こそが一定のイデオロギーを孕んだフィクションである、と主張することももちろんできるだろう。だがさらに言えば、そうした現実のフィクション性を見出す議論は、(前節の議論を踏まえて)フィクションの現実性をめぐる議論と同時並行的に進められるべきだろう。よかった探しを現実と思ひ込んでいる読者の言葉が、その非現実性を指摘する批評家たちの言葉の、見事なまでの裏返しになっている点に注目したい。アメリカ児童文学批評と、その分野のことはおそらく知らないままなされた彼の発言との奇妙な一致は、何らかの言説的メカニズムが稼働していることを予感させる。

ポリアンナに対する好悪入り交じった反応は、人々の「フィクションとしての楽観主義」への対処であったのではないだろうか。

4. 現実との直面

今日のパースペクティヴからすれば、ポリアンナのよかった探しには理不尽かつ理解不能なものに見えるところがあるかもしれない。しかし原作小説の読者なら、その作品が最初世に現れたときの評価が、あらゆる意味で肯定的・好意的なものであったことを知っている。

それは「ポリアンナ・フィーバー」と呼ばれ、「第一次世界大戦に次ぐ影響」をアメリカに与えたとまで騒がれた極端な出来事だった。^①

「よかった探しは」この世が作られて以来発見された最も偉大なゲームと言っても、おそらく決して言いすぎにはなるまい。「この世をより楽しくするのに貢献した人々のリストに、ポリアンナとエレナ・H・ポーターの名前を付け加えるべきだ。」——新聞各紙はこぞってこの小説を絶賛した。その作品には人を変える力がある、という感謝の言葉が、株式仲買人や牧師、伝道師、億万長者、裕福な未亡人、事務員、そして感動してすすり泣かんばかりの新聞記者たちから殺到した。

一九一三年の初版と同時にミリオンセラーを記録した単行本は一九二〇年には四七刷を重ねるまでになり、ヨーロッパ各国だけな

くブラジル、日本、トルコなど十数か国語にも翻訳された。さらに映画や劇、キャラクター商品が作られ、「白い山小屋やコロラドの喫茶店、テキサスの赤ん坊たち、インディアナのアパート、牛乳のブランド名にまでポリアンナの名前がつけられた。」

熱狂の渦は全米に広がり、各地に彼女のファンクラブ「よかったクラブ」が設立された。クラブは『年報ポリアンナ』を発行し、人々はその会員であることを示すために、ほほえむ女の子の絵のついたエナメルボタンをこれ見よがしに身につけはじめた。そのクラブには「喜びの子供たち」——それは三二歳から七六歳の刑務所の囚人たちのグループだった——までもが含まれていた。

原作者ポーターの死後もその人気は衰えず、さらなる続編を待望する人々の声は、別作者たちの創作意欲をかき立て、『ポリアンナ、ハリウッドへ行く』『気をつけて！ポリアンナ』などの「ポリアンナもの」十二本（五〇本という説もある）を生み出すにいたった。^③

これら一連の現象の極めつけが「ポリアンナ」の普通名詞化である。小説『ポリアンナ』のいくつかある邦訳はすべて、訳者あとがきの中で“Pollyanna”が彼女のような楽観主義者一般を指す名詞として定着していること、また“Pollyannish”（ポリアンナ）のように楽観主義（的）なと“Pollyannism”（ポリアンナ）のような楽観（主義）という二つの派生語が生まれていることを、『ウェブスター辞典』を参照しつつ紹介している。

こうした事実はポリアンナ好きの人間（訳者たち自身を含めて）にとって、自分たちの嗅ぎつけたポリアンナの「現実感」に適って

いる。すなわち、『ポリアンナ』はそもそも世に出た最初の瞬間から、現実を起こったにもかかわらず非現実的な現象を引き起こしていた。歴史は極端な楽観主義が現実を大手を振ってまかり通りうることを示している、というわけである。『ポリアンナ』が書かれた二〇世紀初頭のアメリカという時空間は、まさしく楽観主義が自然なものであることを疑わない「常識」から成り立っていたのだろう。

たしかに、『ポリアンナ』ほど徹底して楽観主義的な作品が徹底的に好意的な評価を受けた非常に極端な事例は、おそらく他に類を見ないだろう。だがその小説の訳者たちは、それが児童書の解説文であるためか、『ウェブスター辞典』の正確な記述を引用しない。実際には、そこには次のように記されている。

pollyanna: 手に負えない (irrepressible) ほどの楽観主義や、あらゆるものに良さを見い出そうとする傾向によって特徴づけられる気性や本質を持っている人。過度に (overly)、またはしばしば盲目的な (blindly) までに楽観的な人物。苛立たしいほど (frustratingly) 快活な人間。^④

否定的ニュアンスを多分に含む修飾語から、ポリアンナの楽観主義への人々の苛立ち (exasperation) が伝わってくる。(また英和辞典の中には、あからさまにそれを「軽蔑語」と規定しているものもある。)

そして訳者たちはまったく触れていないことだが、ポリアンナの巻き起こした熱狂的なブームは一九四〇年代になると突然立ち消え、その小説を読む者は誰もいなくなってしまう。一九四七年の『ブ

ッド・ハウスキーピング』誌には、もはや「古きよき時代の」ものとなったよかった探しを懐かしむ作家R・シャンクランドのエッセイが寄せられていたという。

この価値転落はなぜ生じたのか。はつきりとしたことはわからないが、J・グリスウォールドが推測するところによれば、「よかったクラブ」の面々は明らかにやりすぎたのである。彼はたとえば「よかったクラブ」の会報に、車に轢かれた少女が「轢いた車がリムジンだったのでよかったわ!」と言っている漫画が掲載された事例を紹介している。^⑩

『ポリアンナ』自体の中にも行きすぎた表現は目につく。関節炎で体が曲がっている庭師のトムに向かって、それ以上体をかがめる必要がなくてよかったと慰めたり、ポリアンナ自身が交通事故にあつて歩けなくなるエピソードの中で、「以前は」歩けたのがよかった、とわけのわからない納得の仕方をするときである。その意味では、よかった探しは必然的に自滅する運命にあつたのかもしれない。ここに見出しされるのは、過剰さゆえの現実乖離、という図式である。ポリアンナ・フィーバーという、極端に楽観主義的な作品が極端な人気を得た後で完全に忘れ去られた出来事以後、この現実主義的図式は『ポリアンナ』に対する人々の対処の仕方を決定づけることになった。

この図式に基づけば、ポリアンナに苛立つ人々の現実主義的な判断は、次のような結論に到達することだろう。

第一に、過去実際に存在したポリアンナ・フィーバー、つまりポ

リアンナの魅力は、まさしく過去にのみ存在した時代遅れで偶発的な代物にすぎなかった。少なくとも、現代人にとってそれが魅力や心地よいものとして感じられるとは思われない。こうしてたとえばM・フィッシャー『児童文学人名辞典』は、ポリアンナは「半世紀前の小説にある、知ったかぶりで感傷的なものすべての雛形のように思える」と断じることになる。^⑪

第二に、そのようなよかった探しにあえて納得のいく理由づけをするとなれば、多くの場合、生きていく上での耐え難い苦痛に対する心理的な防御と見なすのが最も説得的だということになる。そして人々はそうした防御はいずれ限界を迎えるだろうと予測する。たしかに、小説の続編『ポリアンナの青春』の中には、ポリアンナがボストンのノースエンド地区の貧困に直面し、よかった探しがそこではうまくいかないことを知る場面が描かれている。(ただ彼女にとってそれは、そこではうまくいかなかっただけのことなのであるが。) またしかも、今日では「ポリアンナイズム」は実際に精神医学用語として定着している。一九五四年、R・シェイファーが『ロールシャッハ・テストにおける精神分析的解釈』の中で、「ポリアンナの否認 (polyannaisish denial)」と呼ばれる症例を研究し、心身症によく見られる現実逃避的防衛機制と位置づけたのがその最初だった。ポリアンナが「病氣」であることがまさしく「科学的」に認められる格好になったわけである。^⑫

たしかに、このように考えれば、『ポリアンナ』の訳者たちが普通名詞「ポリアンナ」の意味を歪曲して伝え、ポリアンナ・フィー

バーの顛末にあえて触れようとしなかった理由も推測できる。動かしがたい現実に直面したポリアンナ好きたちは自分たちの「現実感」を何かなんでも救い出そうと、嘘を真と言いくるめようとしたのである、と。

こうしたポリアンナ嫌いの苛立ちⅡ過剰な怒りを肯定しがちな主張には、グリスウォールドや彼が依拠しているI・ハッセンのような論者の反対もある。

グリスウォールドによれば、ポリアンナは「心優しいトリックスターで、おバカさんのふり」をしているだけ」である。彼女が叔母にあてがわれたむさ苦しい屋根裏部屋を無邪気に喜んでみせ、パレーをかえって恥じ入らせるときなど、ポリアンナはハッセンの言う「過激な無邪気さ (radical innocence)」をうまく利用し、「成熟」——あるがままの現実に仕方なく屈すること——に抵抗し、また一定の勝利をおさめているというわけである。^④ ポリアンナは一つの有効と思われる現実対処の仕方を提示していることになる。

ここで好悪どちらの立場を採用すべきかは問題ではない。ただいずれの場合もポリアンナの非現実性が「過剰さ」によって説明されているのは示唆的である。つまり両者はともに、同一の「分別ある現実主義」に基づいて、その境界線をめぐる議論を戦わせているのである。だが、すべてをフィクションの現実逃避機能に帰す考え方も、けっして行き過ぎでないとは言い切れないとはいえ、グリスウォールドⅡハッセンのようなやや穿ち過ぎの気味がある——本当にポリアンナはそこまで思慮深いのか？——主張が出てくること自体、

現実離れた過剰さをともなった「現実主義」が存在する証拠と言えるかもしれない。

しかし、ポリアンナへの否定的評価はポリアンナ・フィーバーの反動として形成されたわけでは特にならない。ポリアンナへの苛立ちは「よかったクラブ」がやりすぎる以前、その小説が出版された当初から存在していた。

『オックスフォード英語辞典』を見る限り、行き過ぎた楽観主義者という意味の普通名詞“Pollyanna”は、一九二一年にすでに用いられていたことがわかる。また“Pollyannish”の最初の用例は一九二二年のものである。つまりポリアンナ・フィーバー最盛期にしてすでに彼女の名前は「軽蔑語」として用いられていたことになる。

作者ポーター自身の次のようなコメントがそのことを裏づけている。「私はポリアンナの物語で苦しめられてきました。私はしょっちゅう誤解されてきました。皆はポリアンナが何にでもよかったと言いつらすものと思っています……私は不安や苦しみや邪悪なことを否定すべきだと考えたことはありません。ただ『見知らぬ人には陽気に挨拶』した方がいいと思っただけです。」^⑤

これらの事実は、「ポリアンナイズム」が人々の現実主義的価値観と相互補完的に構築されたことを示していると思われる。いずれにせよ、結局はポリアンナ（あるいは視聴者や読者）は、楽観主義が現実に直面する現場に立ち会うことになる。現実が楽観主義の実現を阻むものとして立ち現れ、だからこそ楽観主義はフィクションなのである。その意味でポリアンナが表象していたのは楽観主義と

いうよりは現実の危機、フィクションの分別に対する反抗的挑発に遭遇した現実主義の危機と言える。

「ポリアンナが実際にいたら困る」というポリアンナ好きたちのあの言い訳は、このことを（非常に屈折した形でだが）よく表している。『アニメック』誌は「ポリアンナよかった事典」という特集を組んだとき、そのページの扉を飾ったイラストには、よかったの光で世界を照らし出す宗教画のごときポリアンナの姿が描かれ、その背景には「ソ連原発事故」「岡田有希子自殺」などの当事の陰惨な事件がちりばめられていた。この種のパロディマンガは当事数多く描かれたが、常にネガティブな内容を持っていた。だがこれはポリアンナ好きたちの心の奥の反感を示しているのではなく、これみよがしな分別の肯定と見るべきであろう。彼らは「普通の人間ならポリアンナに苛立つはずだ」ということを知識として知っているの
で、嬉々として苛立つてみせているのである。彼らはよかった探し
をあげつらいつつ愛好できる。彼らにとっても楽観主義は実は問題
でなかったからである。

5. 真実との直面

こうした人々のポリアンナへの感情は好悪いずれにせよ、いかなるものにも還元されない無償のもの、その意味でどこか宗教性を帯びたものであるように思われる。

そもそもよかった探し自体、聖書の中に「よかった」という言葉

が八百回出てくることを引き合いに出しつつ、彼女の父ジョン牧師が始めたものだった。彼女のメッセージは福音伝道主義的な思想に非常に適ったものであることは容易に見て取れる。だからこそその小説は当初、『クリスチャン・ヘラルド』誌に連載され、聖職者たちは率先してポリアンナ・フィーバーに加わったのである。

さらに『ポリアンナ』に限らずその時代の児童文学の多くには宗教的モチーフを指摘することができる。クリスチャン・サイエンスに密かな信奉を寄せるF・バーネット『秘密の花園』はその典型的な例だが、キリスト教的な「罪」を嫉妬、憎悪、気むずかしさといった「否定的感情」に置き換えた構造の作品は非常に多い。

だが単純にすべてをキリスト教文化圏の問題に還元したいわけではない。一方でそうした作品構造は、「宗教的改心」というかつてのプロテスタント的テーマがM・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』以後否定され、『若草物語』に見られるような「性格改善」というより現世的・現実主義的な問題関心にとって代わられたアメリカ児童文学の歴史的变化を示しているからである。聖職者たちの思惑はどうあれ、聖書や福音書はもはや直接的な影響力を喪失していたのであり、「宗教色抜き」の世俗的な物語でなければ、『ポリアンナ』もおそらくはあれほどの人気を博すことはなかっただろう。

ここにある種意図せざる結果として現れてきている論点に注目することができよう。つまり、よかった探しは、神による救済に比べれば現実離れの度合いははるかに少なく、分別をわきまえたものだったと言えるかもしれない、ということである。たしかにポ

リアンナの楽観主義は、現実的な分別をわきまえた人間にとつては、宗教的ないし神秘的なものとしてしか納得のしようのないものかもしれない。だが同時に、「分別」もまた人々には馴染みのない、それゆえ宗教にでも引きつけないことにはわきまよのない現実離れした代物だつたに違いない。ポリアンナとキリスト教、宗教的思考と現実主義的な分別との間には相補的な並行関係を見出すことができる。

そして、ここで思い起こされるのはW・ペンヤミンが嫌悪と定義したもの、つまり「嫌悪をもよおすとみられるものと同類とみなされることの恐怖」のことである。『ポリアンナ』が——一九二〇年代アメリカでも、八〇年代日本でも——受け入れられたのは、それ自体人々の現実主義的な感情を傷つける性格ゆえにだつたと理解される。ポリアンナに「過剰な」好意を寄せる人々の固定観念は、たとえそれが社会からの追放を引き起こしかねないとしても、人々のドクサに反してポリアンナこそが真理を保持しているのだというメッセージを発していた。(たとえば『アニメック』誌の読者のように)。この偏執的な観念は、自分は現実とフィクションの分別がついているという「現実感」に根ざしているがゆえに、現実主義の構造こそがすでに幻想を孕んでいる、という真実に触れていると思われる。分別は彼らの現実Ⅱフィクションの社会的構築ための支えになつてくれるにすぎないからである。

ここにフィクションを信奉することの嘘くささと、分別をわきまえることの後ろめたさとの相補的關係が明らかになることだろう。

現実にまかり通るはずのないフィクションを無理と知りつつも頑なに信奉しようとする者の態度は無力な悪意をともなっている。そうした態度は現実にまかり通っているフィクションを信奉する者の哀れみや失笑といった寛容な反応ではなく、苛立ちや不快感をともなつた狭量な感情を喚起する。これは単なるフィクションを述べたつもりでいる者たちが、それと知らずそれぞれの現実の現場に遭遇した、とも言えるかもしれない。

ポリアンナを好む人々も嫌う人々も、それぞれの「現実感」を肯定できるのは、それぞれの依拠する現実Ⅱフィクションの肯定的側面しか目に入っていないからである。

ポリアンナ好きの人間には、楽観主義(というフィクション)の肯定的側面しか見えていない。だが分別の否定的側面は、ポリアンナ好きたちの歪んだ目を通してのみ見える真実である。だからこそ彼らは分別がまさしくフィクションであることに気づき、ポリアンナ嫌いの現実主義者を「よかつたさがし」(ポジティブ・シンキング)に誘おうとする。

一方、ポリアンナ嫌いの人間は、分別(というフィクション)の肯定的側面しか見えていない。だが楽観主義の否定的側面はポリアンナ嫌いの歪んだ目を通してのみ見える真実である。だからこそ彼らは楽観主義がまさしくフィクションであることに気づき、ポリアンナ好きたちの楽観主義に苛立つのである。

注

- (1) Robert Scholes, *Fabulation and Metafiction*, University of Illinois Press, 1979; 巽孝之『メタフィクションの謀略』、筑摩書房、一九九三年。
- (2) Tony Bennett (ed.), *Popular Fiction: Technology, Ideology, Production, Reading*, Routledge, 1990.
- (3) Eleanor H. Porter, *Pollyanna* (1913), *Pollyanna Grows Up* (1914), Puffin books, 1994. (村岡花子訳『少女パレアナ』・『パレアナの青春』、角川文庫、一九八六年)。『愛少女ポリアンナ物語』(全51話)、楠葉宏三監督、堀江美都子ほか声の出演、日本アニメーション・フジテレビ制作、一九八六年。なお、『Pollyanna』の日本語表記は長年「パレアナ」が用いられてきたが、W・ディズニー制作の映画 (*Pollyanna* (1960)、デヴィッド・スウィフト監督・脚本、ハイリー・ミルズ主演) が日本での公開に際して「ポリアンナ」を用いて以降、その表記が主流化した。世界名作親子の会『名作アニメもうひとつの物語』、ワニブックス、一九九三年、一七七頁参照。
- (4) 「ポリアンナよかった事典」、『アニメック』二月号、一九八七年所収、三五頁。
- (5) 『アニメーション』四〇八月号、一九八六年などを参照。
- (6) 『アニメック』七月号、一九八六年、一六〇頁。
- (7) Shirley Marchalonis, "Eleanor H. Porter", in James J. Martine (ed.), *Dictionary of Literary Biography Vol. 9: American Novelists, 1910-1945 Part 2*, Gale Research Company, 1981, pp. 293-296.
- (8) ポリアンナ・フィーバーに関する歴史的事実はここでは主に、ジエリー・グリスウォールド『家なき子の物語——アメリカ古典児童文学にみる子供の成長』遠藤育枝・藤岡糸子・吉田純子訳、阿吽社、一九九五年、第12章 (Jerry Griswold, *Audacious Kids*, Oxford University Press, 1992.) の図表に基づく。
- (9) Elizabeth Horton, *Pollyanna in Hollywood*; Ruth I. Dowell, *Watch Out, Pollyanna!*, Pollyanna Productions, 1986.
- (10) Webster's *Third New International Dictionary*, G. & C. Merriam Co., 1971, p. 1756.
- (11) グリスウォールド、前掲書、二五七頁。
- (12) Margery Fisher, *Who's Who in Children's Literature*, Weidenfeld and Nicholson, 1975, p. 288.
- (13) Roy Schafer, *Psychanalytic Interpretation in Rorschach Testing*, The Psychological Corporation, 1954.
- (14) グリスウォールド、前掲書、および Ihab Hassan, *Radical Innocence: Studies in the Contemporary American Novel*, Princeton University Press, 1961.
- (15) *The Oxford English Dictionary Second Edition* Vol. XII, Clarendon Press, 1989, p. 43.
- (16) Grant Overton, "Eleanor Porter", *The Women Who make Our Novels*, Books for Libraries Press, 1967, p. 266. ここで引用されている発言。
- (17) 「ポリアンナよかった事典」、三四〜三五頁。

Optimism in Mass Culture: Focussing on Pollyannaism

Wataru ARITA

Optimism, a surely positive value, is always dogged by a sort of unrealistic implausibility. But, on the other hand, discreet realism don't have any good reputations. This paper considers the problem of optimism/realism in mass culture as the problem of social construction of reality/fiction. And Pollyanna's very extreme optimism called "glad game" is adopted as the concrete material in the consideration. She is the heroine of Eleanor H. Porter's novel *Pollyanna* — in 1986, that was made into a TV animation in Japan. Through the work acquired so extreme popularity that gave rise to the social phenomenon called "Pollyanna fever", it is argued that the ways of construction of reality-fiction by those who like it and those who hate it each other, and the complementary relationship of the ways.

Key Words

optimism, realism, social construction, fiction, Pollyanna